

令和7年度

男女共同参画に関する

小学生・中学生の作文

入賞作品集



主催 日立市・日立市教育委員会

最優秀賞

ぼくの夢の探し方

助川小学校 六年

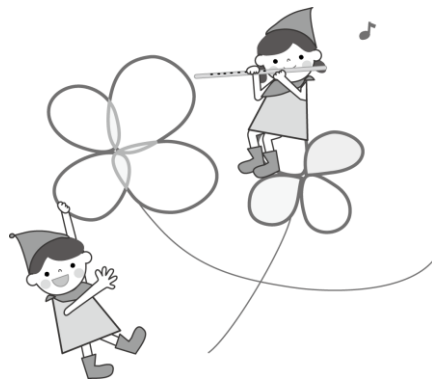
青木 一真
あおき かずま

ぼくは、進級するたびに毎回なやむことがある。それは自己紹介カードの将来の夢のところである。今までは「夢はお探し中」と書いてきたが、今年は思い切って「大好きな自動車メーカーに入学」と書いた。でも、なんだか違う気がしてもやもやした気持ちになった。将来の夢って今すぐ決めないといけないのかとまた迷子になってしまった。スラスラと書いていく友達を見るとうらやましく思ってしまう。

少し考え方を変えて、将来の夢を大きな目標とすると身のまわりにある小さな目標を積み重ねていけば「夢」につながるの

ではないかと思った。小さな目標ならたくさんある。その中の一つが受験を突破することだ。ぼくは今、絶対に行きたいと思っている学校があるので受験勉強をがんばっている。ぼくの周りには受験を考えている友達が多いので、先生に相談した時の一言がきっかけだ。「今の仲間も大切だけど、新しい仲間を探しに飛び出してみるのもいいと思うよ。」ぼくは、そんな考え方もあるのかとハッとした。先生の一言が受験勉強を始めるというスイッチを押してくれたのだ。一步を踏み出してから新しい仲間や塾の先生、たくさんの難しいテキストに出会って毎日ふんとう中だ。問題が難しくなると泣きそうになることや思うように成績が上がらずに落ち込むこともあるけど、少しずつ前進している気がしてとても楽しい。学校見学や説明会に行くと、何か見つけられるような気持ちになってわくわくした。

ぼくの夢探しはお探し中にもどってしまったけれど、勉強という小さな目標を積み重ねながら本当にやりたいことを自分のペースで見つけた。



優秀賞

しょうらいのゆめ

助川小学校 二年

添田 康太
そえだ こうた

ぼくのゆめは新しゅの生きものをはっ
見することです。ぼくは、生きものさがし
が大すきで、めずらしい生きものを見つけ
ると、とてもうれしいので、新しゅを見つ
けられたら、どんなにうれしいきもちにな
るだろうと考えただけでワクワクします。
新しゅを見つけるためには、生きもの
ちしきをたくさんふやして、新しゅである
かを見わけられるようになるひつようが
あります。そのためにぼくは、図かんやイ
ンターネットなどで、すがたやせいたいを
しらべています。

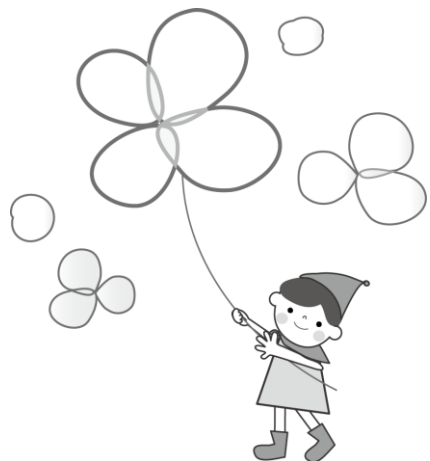
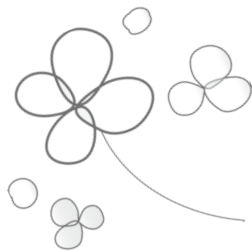
また、新しゅの生きものを見つけるため
に、草むらがあるとさがしにいきたくなり

ます。さいきんではぜつめつきぐしゅにな
りそうなツノトンボや、羽がとうめいなス
ケバハゴロモを見つけることができました
た。また、この前は、ピンク色のショウリ
ヨウバッタを見つけてとつぜんへんいだ
と思いました。しらべてみたらショウリ
ユウバッタモドキのようちゅうでした。思
つてたのとちがつてさんねんでした。

このまえ、テレビに出ていた新しゅをた
くさん見つけている人が、

「にんたいとふくつのどりよくがひつ
ようです。」

と言っていました。なので、ぼくは生きも
のについてたくさんべんきょうして、そと
にでて新しい生きものを見つけれたら
うれしいです。かんたんには見つけられな
いと思いますが、あきらめずにさがしつづ
けます。



優秀賞

みんなが夢をえらべる世の中に

成沢小学校 五年

にし
西 織花 おりか

私の将来の夢は、介護士になることです。高齢の方や、体の不自由な方の手助けをしながら、その人が安心して生活できるようにする仕事は介護士です。

スーパード、足がわるい私のおばあちゃんに対して、おねえちゃんが、やさしく声をかけながら手を引いてくれるのをみて、

「私も将来、こういう仕事につきたい!」と思いました。

介護士の仕事は、重たいものを持つたり、お年寄りの体を支えたりするので、力がある場面もあります。だからか、

「男の人のほうが向いている。」

と考える人もいます。

でも、女の人でも心をこめて人と向きあうことができれば、力だけじゃないやさしさで、立派に働けると思います。

今は、男の人も女の人も、どんな仕事でもえらべる時代だと思います。けれど、テレビやニュースでは、

「女性の社会進出が足りない。」「男性ばかりの職場」などという言葉聞くことがあります。正直私は何を言っているのかわかりませんでした。ですが、男だから、女だからという理由で夢をあきらめたり、はたらくにくくなっていることは、分かります。

たとえば、お父さんも家事や洗たくをします。私が、「お父さんなのにごいね!」と言ったら、「お父さんだからじゃなくて、人としてすることがあたりまえなんだよ。」と言われて、はっとしました。これからの社会は、男も女も関係なく、協力しあって

生きていくことが大切だと思います。

介護士になったら、同じ職場ではたらく人たちと協力しながら、一人ひとりの利用者さんにとって気持ちよく過ごせる場所をつくりたいです。そして、男の人も女の人も自分の力を生かして、助けあえる、そんなチームの中で仕事がしたいです。

将来、わたしが働くころには、性別ではなく、どんな思いで働くかが大切になる世の中になってほしいです。

そして、私もそんな社会を作る一人になれるといいなと思います。



佳作

ぼくが料理をすきな理由

助川小学校 三年

まずだ
舛田 琉玖

ぼくは、おとなになったら料理ができる人になりたいです。なぜそう思ったかという、それには二つの理由があります。

一つ目の理由は、ぼくのお母さんがつくるごはんがとてもおいしいからです。ぼくが学校に行く前にあたたかいみそしるがでてきていて、それをのむと一日がんばれる気持ちになれます。また、お母さんは、つかれて帰ってきた時におにぎりをにぎってくれます。それを食べたぼくは、今日もがんばってよかったと感じることができします。

二つ目の理由は、料理を作ることが好きだからです。ぼくは、よくお母さんとスー

パーに夕食の買い出しに行きます。お母さんはぼくに

「ごはんはなにがいい。」

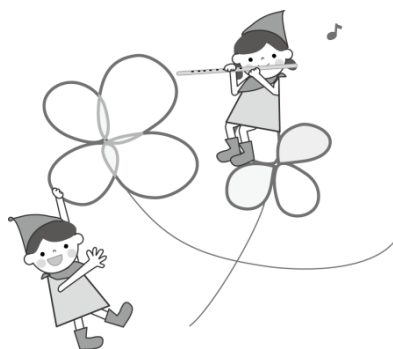
と聞きます。ぼくが、

「カレーやハンバーグ。」

と言ったら、じゃあ一緒に作ろうと言ってくれます。ざいりようを買って家に帰ると、野さいをあらったり、切ったり、おにくをいためたり、お肉をこねたりして、あじつけをします。最後におさらにきれいにもりつけをしたら、おいしい夕食のかんせいです。お母さんと二人で作ったごはんはとてもおいしいです。いつかぼくが一人で料理が作れるようになったら、お母さんはたすかったり、よろこんでくれたりすると思います。なぜなら、ぼくはお母さんに料理を作ってもらって、毎日そう感じているからです。

お母さんは自分の料理のあじは「おばあちゃんのあじ」だと言っていました。でも、

それはとてもあったかくてやさしいあじなのです。ぼくはまだそのあじを作ることができないけど、お母さんにおそわりながら、「おばあちゃんのあじ」を作れるようになりたいです。



佳作

折り紙の楽しさを世界中に広めたい

助川小学校 四年

高橋 奏丞
たかはし そうすけ

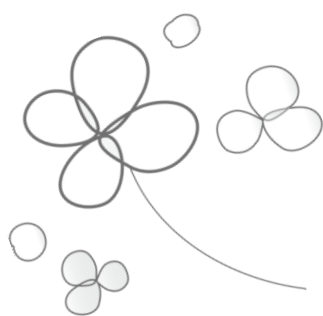
ぼくの、しょう来のゆめは、折り紙作家です。折り紙作家になりたいと思ったきっかけは、大洗水族館でイルカのショーを見たことでした。そのあと、海の生き物が好きになりました。そこで、ぼくは、色々な海の生き物について調べているうちに、シヤチが黒くてかっこいいと思いました。それで、シヤチについて調べていると、折り紙でシヤチを折る方法を見つけました。そこから、シヤチを折ってみたいと思い、百円ショップで大きな折り紙を買いたくさんシヤチを折りました。シヤチの折り方を色々調べているうちに、ドラゴンの折り方を見つけ、いつか折ってみたいと思うよう

になりました。それから、百円ショップでもっともつと大きな和紙を買って、ドラゴンを折ってみました。何度もしつぱいして泣いたり、おこったりしましたが、ついになまく折れるようになりました。そのときは、とても達成感があり、うれしかったです。

ぼくの今の目標は、エンシエントドラゴンをきれいに折ることと、ウエスタンドラゴンというむずかしくてかっこいいドラゴンを折ることです。そのためにぼくは、夏休み中は毎日一時間折り紙の練習をすることにし、動画や本で折り方をよくたしかめて、今よりももっと上手に折れるようにがんばっています。

折り紙作家になったら、ぼくは折り方の本を出べんしたり、インターネットに折り方の動画をあげたいです。そして、折り紙の楽しさを世界中の人々に伝えたいです。そのために、折り紙の練習に加え、

英語の勉強や、動画の作り方の勉強などもやっていきたいと思っています。



佳作

わたしの将来の夢

助川小学校 四年

しまぎき
島崎 柚衣

私の夢は、英語を上手に話して世界中の人とコミュニケーションを取ることです。

そう思ったきっかけは、七才の時に行ったシンガポールへの家族旅行です。シンガポールでは、たくさんの国の人たちが英語で話をしていました。はだのいろもアクセントも服そうもちがうのに、みんながえ顔で楽しそうに話をしていました。私もいつか英語で世界中の人と話がしたいです。

シンガポールのテーマパークでアトラクションに乗った時、家族と席がはなれてしまいました。席のベルトを外す時、こまっていたらとなりの席の外国人が助けてくれました。話している言葉の意味は分か

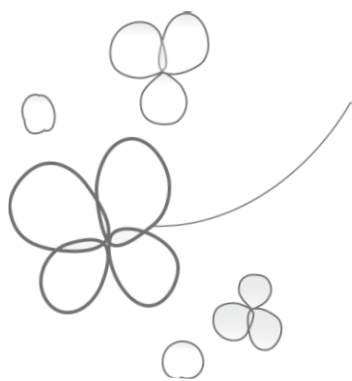
りませんでした。え顔でとてもやさしかったです。

私は、アメリカ、インド、タイ、フィリピンなど、たくさんの国に行ってみたいです。旅行では新しい食べ物を食べたり、有名な場所を見たり、その国の人の生活を学びたいです。

私の父は中学生の時にニュージーランドのタウランガへ、私の母は高校生の時にオーストラリアのメルボルンで数日間ホームステイをしたそうです。父も母も楽しかったと話しています。私も機会があればさん加するといいいよと言われますが、まだ今の私には家族とはなれてホームステイをするゆう気がありません。この後もっと英語の勉強をして自信がついたらちよう戦したいと思います。

今、私は英会話を習っています。英語を勉強することはかん単ではありません。ときどき間ちがえてしましますが、夢のため

にくり返し、練習したいと思います。英語はたん語を知っているだけではなく、ゆう気を持って話すことが大切だと思います。いつか必ず自信を持って英語を話せるようになります。その時はたくさんの人と話して、もつと世界を見てみたいです。これが私の夢であり、かなうまでぜつたいにあきらめません。



佳作

性と生き方

成沢小学校

六年

佐藤 さとう
七華 ななか

自分は、幼い頃から同性としか一緒に遊んでしかいけないような仕組みに疑問をもっていました。そして成長していくうちに性自認と性表現、周りの子たちとの関わりの壁にぶつかりました。

今、日本や世界でも性の悩みをもっている人はたくさんいます。男尊女卑にたえている人もいます。まだ性別に関係なく、そんな世の中ではできる気はしてこないけれど昔に比べれば少しずつなくなってきた今はきつと少し生きやすいのだろうと思います。

そして男女の職業には様々な偏見があります。男の人はお金をかせげる、力仕事。

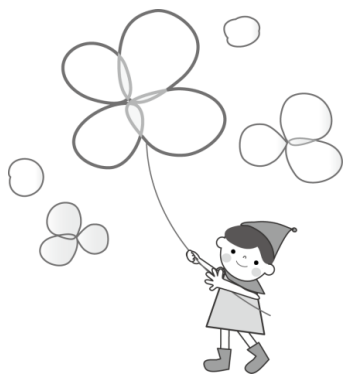
女の人は専業主婦をやれなど。ですがそれは古い考えです。どうしても男性の方が力が強い、こうしないと家庭が成り立たないなどの問題がでてきたりもしってしまうかもしれない。けれど自分になりたいものやりたいことそれを性にとらわれず、自分の気持ちに嘘をつかないで挑戦できるそんな未来がちかいところにあればいいなと思っています。どうか少しでも多くの人が自分の気持ちを大切に働きや生き方ができているならばとてもうれしいことです。

正直、綺麗事ではないかもしれないけれど、男はこの色、この職業、この生き方。

女はこの色、この職業、この生き方。男のほうがい。女のほうが強。そんな偏見と醜い争いがなくなればいいと思うのと同時に、セクシュアリティの悩みがある人や異性が苦手な人たちも自分にあった生き方などがみつかったらいいなと思います。性の悩みが少なくなること

願います。

最後に自分は周りの人に助けられました。だから自分も生き方や生活などで性についての壁にぶつかる人がいたら助けになるようなことがしたいです。そしてみんなが生き生きとすることが僕が夢みる未来です。



最優秀賞

これからの時代生きる人として

十王中学校 三年

こいけ ゆいと
小池 結人

今年の夏は、曾祖母の新盆のため、いつものお盆よりもあわただしく過ぎた。曾祖母は大正から令和の四つの時代を生き抜き、四月に九十九才の大往生で旅立った。太平洋戦争を必死の思いで乗り越え、長男である曾祖父と結婚した。また、祖母も同じく、長男である祖父と結婚し、母も長男である父と結婚した。そして、私も、この小池家の長男である。

曾祖母の時代は、常に男の人を立てて生活し、特に「長男の嫁」として仕えていたと祖母から聞いた。しかし、その様な時代であっても、曾祖父は曾祖母をととても大切にし、優しい言葉をかけたり、家の仕事も進んでやっていたりしたという話をお参りに来た近所の方から聞き、とても嬉しく、誇りに思った。そして、祖母が五十年ほど前に嫁いできた頃は、近所で冠婚葬祭があると町内の女の人

が三十人以上集まり、台所で料理を作り続けていたという。同じ頃、男の人達は、広い部屋に集まって料理を食べたりお酒を飲んだりしていたそう。私は、なぜ男女でこんなにも差があるのか疑問に思い、祖母に聞くと、「女の人は家の事をやるのが当たり前の時代だったけど、考えが変わってきて、あの風習は町内の人たちで無くしていったんだよ」と、教えてくれた。

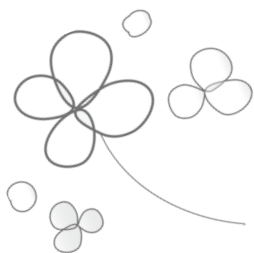
キッチンで昼食を作る両親に私は、祖母から聞いてきた話をした。すると、

「お母さんが仕事に就いた頃、職場でのお茶出しは、絶対に女の人がやる仕事だったんだよ。今みたいに出せる人がやればいいのに。」と、母は包丁を持つ手を止めて私に言った。すると、鍋に火を点けようとした父が続けて、「この間、仕事の用があつて部長さんの所に行ったら直々にコーヒーを入れてくれてね。偉い人とか男の人とか関係なく、自ら行動してコーヒーを出してくれるってすごいよね。」と、話に入ってきた。

曾祖父が曾祖母に思いやりのある言動で接していたこと。女性だけが台所仕事をする冠婚葬祭をやめようとして組んだ五十年前の祖母達。そして、共働きの両親が職場でのお茶出しを通じて思う事。これらの話を聞く

と、時代や周囲の風潮を理由にせず、時代は違っても相手のことを思いやること、違和感に気付いて正しい行動することが、何よりも大切であるということに私は気付いた。

お盆の期間、接客をしていた祖父母は少し疲れていたようだ。できる人ができることをやれば良い、何か自分にできることはないか、私は、ニンジンの皮むきから苦戦し、手を切らないかヒヤヒヤして作ったみそ汁。油がはねて目に飛んでくるのをピョンピョンはねて大さわぎしながら作ったナスの天ぷら。少し殻が入ってしまった卵焼きを作り、祖父母の家に届けた。曾祖母や先祖の祭壇にも料理を供え、「ありがとう、結人。」という曾祖母の懐かしい声が聞こえたような気がした。



優秀賞

自分らしく生きる

大久保中学校 一年

さかき ゆうな
榊 優菜

私は中学生になり、吹奏楽部に入部した。担当する楽器は、クラリネットになった。クラリネットは、優雅で華やかな音になるため私は女の人が多いパートだと思っていた。しかし、音楽には、男だから、女だからというイメージは関係ないと思うようになった。クラリネットを上手に演奏する男の先輩もいるし、チューバという力強い音の出る楽器をきれいな音で演奏する女の先輩もいるからだ。男だから、女だからにとらわれず、自分にぴったりの楽器を堂々と演奏する先輩たちはとても輝いている。

そんな私には、もう一つの趣味がある。好きなアーティストからの影響でギターの練習を始めた。ギターを始めるまでは、男性がかつこよく演奏しているイメージがあった

が、私の好きなアーティストは女性ソロの人だ。様々な意見があっても自分らしく演奏をしている姿がとても魅力的だ。そんな姿を見て、興味がわき、ギターを始めた。上手に弾けるようになってきたところ、友達にギターを演奏しているところを見せてみた。すると、「かつこいいね。」

とほめてくれた。かつこいいという言葉は、小さなころは男の子に使う言葉だと思っていた。しかし、私は友達に言われたその言葉がとても嬉しかった。男女に関係なく、好きなことを貫く楽しさをその時に知ることができた。

私には、もう一組好きなアーティストがいる。男性三人組で活動しているバンドである。バンドといえば、男性ロックバンドというイメージがあった。しかし、最近のバンドは、様々な音楽を奏でていて、自分たちらしさを大切に行っているように感じる。また、女性だけで構成されるガールズバンドなども増えてきている。自分たちの個性を発信しているところが魅力的なところだと感じた。

男女のそれぞれに良さの違いはあっても、根付いている考え方より、「自分らしく」を

大切にしている姿を見て私も勇気をもらうことができた。そして、今までの女だから、男だからという考え方とは少し違う、それぞれの個性や思いを大切にしたいという考えに変わった。時には、自分の考えを否定されて傷ついたり、自信をなくしてしまったこともあることもある。だからこそ、大人も子供も男も女も関係なく、一人一人の個性を大切にするという意識を高めていってほしいと思った。そして、みんながそれぞれを認め合って、自分が好きだと思ったことを堂々とできるようになるとよいと思う。

私は、これからもクラリネットもギターも「私らしく」続けていきたい。そして、性別にとらわれずに、挑戦を続けていくことで、「自分の好きなことを自由に選んでいいんだよ。」

と伝えられるような大人になりたい。



優秀賞

父と母の仕事と私

日立第一高等学校附属中学校 一年

ひろま ももは
弘間 百葉

私は、父と母から、二人とも幼いころからの夢をかなえ、なりたかった職業に就いていると聞いたことがある。ただ、その職業に就くために、父や母がどのような努力をしてきたのかについては詳しく聞いたことは無い。でも、夢をかなえるためには努力が絶対に必要だから、父と母もたくさん努力してきたのだと思っている。そんな、自分のやりたい職業に就いているはずの父と母ではあるが、仕事を休んだり、やめようとしたりしたことがあったということを最近になって私は初めて知った。

私の父は、十三年前、父の勤める会社の同じ階で働く男性の中で、初めて育児休暇を取得した人だそう。私が生まれる時、母が、二週間入院することになった。当時、保育園

児であった兄の世話や、母の入院のサポートをするために、二週間の育児休暇を取ったそう。私の知っている限り、父は仕事を休む人ではない。そんな父が、二週間も休暇を取ったことを聞いて、本当におどろいた。

私の母も、何度も仕事をやめようとしたことがあるそう。私の母は、父の転勤のたびに、職場が変わったが、それでも仕事をやめるということはなかった。仕事を続けるという選択を取り続けていた母が、実は、仕事をやめようとしたことがあったこと、そしてそれが何度もあったということは、私にとっては、予想外なことだった。

父が育児休暇を取ったのは、私の誕生のためだった。母が、仕事をやめようとしたのは、幼かった私の世話をもつたいたいという思いからだった。

私は、父や母が働いてくれているおかげで、毎日元気に過ごすことができている。だから、父も母も、私たち家族のために働いてくれていると思う。でも、父は、

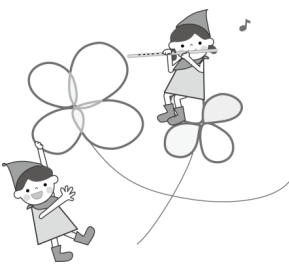
「子供がいてもいなくても、結婚していてもしていなくても、今の仕事を続けていたと思うから、自分のために働いているんだよ。」

ときらりと言う。母も、

「仕事をセーブする時は、自分で決めてそうしているから、家族のためではなくて、自分のためにセーブしているよ。」

と、はつきりと言う。本当にそうなのだろうか。父は、育児休暇取得者第一号になった時、どんな思いだったのだろう。母は、私に対する気持ちと仕事に対する気持ちの間で、どれだけ奮闘してきたのだろう。

私は将来、動物や植物に関わる仕事がしたい。自分の夢をかなえたいけれども、父や母が経験してきたように、自分のしたい仕事をあきらめようとする日が来るかもしれない。その時、父や母や多くの人たちが努力を重ね、仕事を続けてきた歴史があることを思い出したい。そして、一人一人の努力の結果が、だれもがその人らしく望んだ生き方のできる未来につながってほしいと思う。



佳作

自分が生かせる社会へ

日高中学校 一年

小野 おの 愛心 あのん

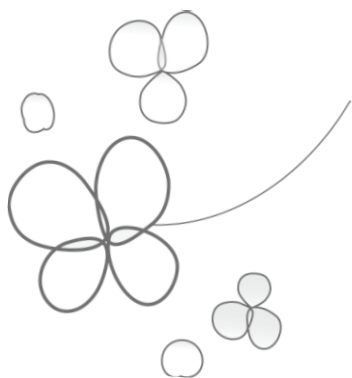
私は、男女共同参画社会の実現に向けて考えたことが二つあります

一つ目は、男性は仕事、女性は家事にとられない生き方になってきていることについてです。私の母は、最近仕事を始めました。以前は、弟たちの世話や家事に一日を費やしていた母ですが、仕事を始めてからは毎日が生き生きしているように見えました。さらに、今まであまり家事に関わらなかった父が積極的に家事に関わるようになって家庭内は明るくなった感じがします。私も、洗濯や風呂洗い、料理などのお手伝いをたまにしますが、将来は専業主婦ではなく社会でキャリアを積みたいと思っています。もし、以前の母のように家事にとらわれていて本当の自分を生かせない人がいたら、家事との両立は難しいかもしれませんが「今は女性だけ

が家事をする時代ではない」ということを教えてあげられるような人になりたいなと考えました。

二つ目は、政治的な分野でも男性だけでなく女性が活躍していることについてです。私はとても政治に興味を持っています。その中でも、歴代の総理大臣についてはよく調べていますが、今まで私が調べてきた中には総理大臣には女性の方がいません。この事実を知った時、とても驚いた一方、こんな疑問が浮かび上がりました。「女性に政治を動かす権利は無いのか。」と。現時点で女性の方の国会議員は増えてはいるようですが、政治の代表としての総理大臣が男性だけでは男女共同参画社会は実現できないのではないのでしょうか。今は将来の夢に悩んでいる私ですが、小学六年生あたりのころは「政治家」を目指していました。「男女」というものの見方が変わってきている今、男性の方だけの意見で政治を動かすことはあつてはならない気がします。自分が将来どんな未来に進むかは分かりませんが、政治の道に進むことがあるのなら、女性の意見も尊重される社会にしていきたいなと考えました。

まだ男女共同参画社会実現への課題が多く残る中、私は自分にできることを見つけることができませんでした。ですが、男女共同参画社会実現に対しての自分の考えについてまとめるだけでも実現への第一歩として協力できたのなら、これからは自分の考えをまとめながらできることも探していきたいなと思います。



佳作

僕の家族の在り方

助川中学校 二年

佐藤 優樹
さとう ゆうき

「わが家は男女平等、家族はチーム、そしてありがたいを忘れずに」
僕がまだ小さい頃から両親に聞かされてきた言葉だ。

そんな両親に育てられた僕の朝の日課は、六時に起床。窓を開けベッドメイキングをする。寝る前に読んでいた本を片づける。それから、ダイニングに行って一番早く起床する母が作ってくれた朝ごはんを家族全員で食べる。食べ終わったら、全員の食器を台所に持っていくし洗う。その後、自分の身じたくをして、水筒の準備や部活の用意をする。それから登校するまでの時間、やっと自分の好きなテレビを見ることが出来る。

同じ頃、父は玄関掃除をして、ゴミを持って一番に家を出る。母は部屋、トイレ、風呂掃除をし、洗濯物を干している。

このように、家族それぞれが自分のやるべきことをやってから家を出ると、帰ってきても家の中がきれいな状態になっているので、とてもすがすがしい気持ちになる。

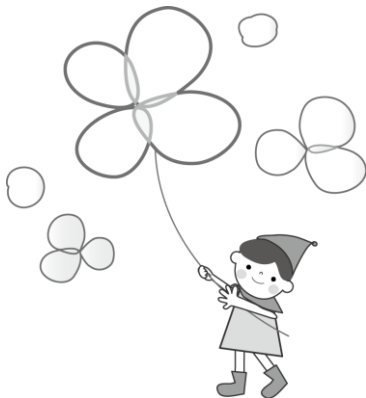
そして夕方の日課は、六時頃、部活が終わり帰宅したところから始まる。学校の荷物の整理が終わったら風呂に入る。風呂から出ると、父は残業で遅いので、母が作ってくれた夕ご飯を二人で食べる。その後は朝と同じで、食器を台所に持っていくし洗う。それが終わったら、宿題などの学習をする。そして、寝るまでの時間は自由時間になる。

同じ時間の頃、母は風呂に入り、帰ってきた父の夕ご飯の準備をし、後片づけをする。そして家族全員がそろったら、一日の最後は、今日の出来事や大好きな旅行や温泉の話をして寝る。

こうして改めて文章にしてみると、やはり母の負担が一番重いなあと感じる。だから、休日は父と一緒に料理、洗濯、掃除、片付けなど率先してやっている。やってみると、いかに大変かということがわかる。それと同時に、案外家事は楽しいものだということも分かる。

これらのことから、男性だから、女性だからと決めつけず、自分が今出来る事をやった方が、色々とうまくいくような気がすると思う。

最後に、いつもお互いを尊重していて、いつも「ありがたい」とあたり前のように言っている両親を僕は尊敬している。



佳作

性別を超えて踊る

日高中学校 二年

おおかわ
大川 琉愛

男女共同参画について考えるとき、私はよく「もし社会が逆だったらどうなるんだろう」と想像します。たとえば、男子が「料理ができて当たり前」と言われ、女子が「力仕事は全部やって」と言われる社会。もしもそうだったら、男女ともに今とは全然ちがう不満や悩みが生まれるはずです。私は結局、性別によって役割を決めつけること自体が不自然なのだと思います。

私は小さい時からダンスをやっています。ダンスの世界では女子も男子も同じステージに立って踊ります。リフトする技は男子が多いけれど、それは女子にだって筋力があればできることで、逆に男子が華やかにしなやかに踊ることもあります。最初は「女の子だからかわいい踊り方をしよう」と思ったりもしましたが、かわいい以外にもきれいでしな

やかだけどキレがありメリハリがある。だどこかに力強さのあるフリもかっこいいと思うようになりました。あるフリ付けでかわいいとは逆に、ガツガツと強そうに踊ったとき、色々な人にほめていただいて自分の踊りに自信がもてるようになりました。

そこから社会に出ると「男性だからリーダー」「女性だからサポート」などと言われる。もしも本当にそうだとしたら、なんだかもつたいないなと思ってしまう。なぜなら、性格や能力は人によってちがうし、せっかくの才能を埋もれさせるのは社会全体の損だ

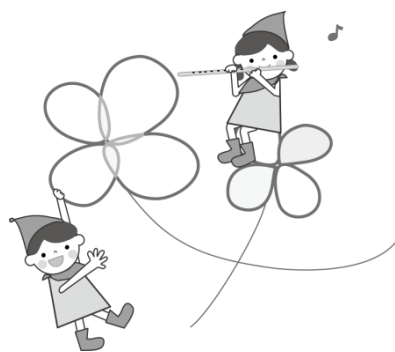
と思うからです。たとえば、運動会でリレーのアンカーを「男子しかやっちゃダメ」なんて決めたら、女子の中にすごく速い子がいても出られない。そんなルールがあったら勝てる試合も勝てないし、楽しさも半減してしまいます。社会も同じです。では、どうすれば

「男女共同参画」がもっと進むのか。私は「性別より個性でチームをつくる」ことが大事だと思います。たとえば学校のグループ活動でも「男子2人女子2人」ではなく、「まとめるのが得意な人」「アイデアを出すのが得意な人」「コツコツ作業するのが得意な人」と

いったように役割を決める。そうすれば、その人の強みが発揮できて、みんなが気持ちよく協力できるはずです。

将来、私はダンスを続けていきたいと思っています。ダンスの舞台はまさに「男女共同参画」の縮図です。性別で決められた枠を超えて、一人ひとりが自分の役割をつかんだとき、舞台全体が一番かがやきます。社会もそうなれば、きっと今よりもっと面白い世界になると思います。

男女にとらわれず、「自分だからできること」を見つける。それが私の考える男女共同参画です。私は「男子役の踊りを女子が全力でやる」ような社会の方が今よりも、もっとずっとみんながのびのびとできて楽しいと思います。



佳作

男女共同参画について

十王中学校 三年

伊藤 いとう
大地 だいち

「男女共同参画」当たり前のように耳にしたこの言葉に、僕は違和感がありました。僕はピンク色も好きだし、でも、友達の男の子がピンクの服をきていると、「女の子みたい」と言われていて、僕は不思議な気持ちになったことがあります。

中学生になり、男女共同参画という作文を知った時、僕は思いました。僕が抱いていた違和感は、まさに「男らしさ」「女らしさ」という、性別によつて決めつけられたイメージがあると思います。

僕たちの身の回りには、まだたくさんの「らしさ」があふれています。例えば、日本では、お父さんは仕事で忙しく、お母さんが家事をすべてこなしていることが多いと思います。学校の部活動でも、運動部は男子、文化部は女子が多いといった傾向が見られる

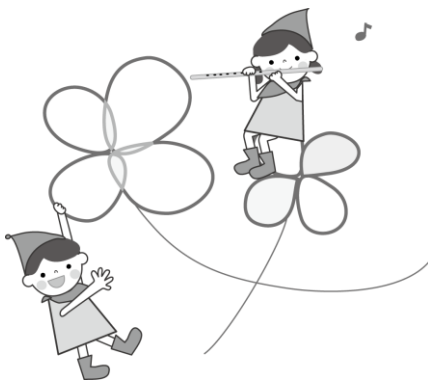
かもしれません。もちろん、それが悪いわけではないと思います。しかし、「男だからサッカー部」「女だから吹奏楽部」というように決めつけるのはよくないことではないでしょうか。性別によつていろいろなことが決まるなんて、おかしいと思います。

大切なのは、その人がどれだけ興味を持ち努力できるかを決めるのが大事だと思います。

僕たちが「らしさ」にとらわれてしまうのは、決して僕たちだけのせいではありません。長い歴史や、メディアが発信する情報が、知らず知らずのうちに僕たちの意識に吸い込まれていきます。でも、だからこそ、僕たち一人一人が意識を変えていくことが重要だと思います。

そして、男女共同参画とは、男女の役割を入れ替えることではありません。性別に関係なく、誰もが自分の個性や能力を発揮し、自分らしく生きられる社会を目指すことなのです。それは、僕たちが本当にしたいことを選べるのも自由であり、互いの違いを認め合い、尊重し合える豊かな社会を築くための第一歩なのだと思います。

では、僕たちは一人一人できることはあるでしょうか。大きなことをする必要はないと思います。まずは、身近なところから意識を変えていくことが大切だと思います。例えば友達との会話の中で、「男だから」「女だから」という言葉をあまり使わないように心がけること、部活動や委員会の役割分担をする時に、性別ではなく、希望を優先すること、そして何より、自分自身が「こうあるべきだ」ということにとらわれず、自分の「好き」や「やってみたい」という気持ちを大切にすることが、大切だと思います。





発行 日立市市民生活環境部女性若者支援課 男女共同参画推進室
〒317-0073 日立市幸町 1-21-1 日立シビックセンター 6 階
TEL : 0294-26-0315
E-mail : josei@city.hitachi.lg.jp



日立市男女共同参画社会
シンボルマーク